

まつのお
松之尾遺跡
(枕崎市松之尾町)

位置と環境

松之尾遺跡は、鹿児島県枕崎市松之尾町に所在し、枕崎港の北側の砂丘上にある。

遺跡の所在する枕崎市は、鹿児島市街地の南々西約45kmの地にあり、北限にある蔵多山の山系が左右にのびて隣接する市町との境界をなしている。この山系は阿多溶結凝灰岩からなり、全市の大部分をなし、露天掘りの金鉱等が存在する。

北・東・西の三方を山系に囲まれてはいるものの、南は東シナ海に面しており、北から南へと傾斜した地形を呈している。

本市の中央には、加世田市津貫に源を発する花渡川が、溪流を合わせて南下して海に注いでおり、流域には200ha余りの水田が開かれている。

平地は、安山岩上に堆積した火山灰層から成っており、西南部が肥沃であるが、北東部ではコラ層が分布している。

海岸線は、比較的単調であるが、そのほとんどは阿多溶結凝灰岩よりなる海食崖で、砂浜は松之尾遺跡のある松之尾一帯のみであった。

しかし、その砂浜は、昭和26年に枕崎港が第3種漁港の指定を受けたのを機に、港湾の拡張工事が計画され、頻繁に襲来する台風の災害をさけるために、松之尾の浜を掘り下げて内港としたためと、花渡川下流の左岸に形成されていた干潟の埋め立て工事に、松之尾の砂丘をもってその干潟が埋め立てられたために、松之尾砂丘の本来の姿は消失してしまっている。

調査の経緯

遺跡を含む砂丘及びその背後地の13,000㎡の範囲に枕崎市松之尾土地区画整理事業（土地区画整理事業法3条2項）が計画されたため、枕崎市は遺跡の重要性を考慮し、県教育委員会とその取扱いを協議し、昭和55年には確認調査が行われた。

調査の結果、壺形土器、高坏、埴、鉄製品等の遺物のほか、土壌墓等が確認され、その範囲は海岸寄り約4,000㎡。遺構、遺物を包蔵する層は現砂丘下



第1図 松之尾遺跡の位置

の黒色砂層で、地表より約30cm～3, 4 mの位置であることが判明した。

この結果をもとに、計画工事の性格等を考慮し計画区域内は昭和56年発掘調査（調査面積1,200㎡）を実施し、記録保存された。海岸寄りの約2,000㎡については現状保存されている。

遺構と遺物

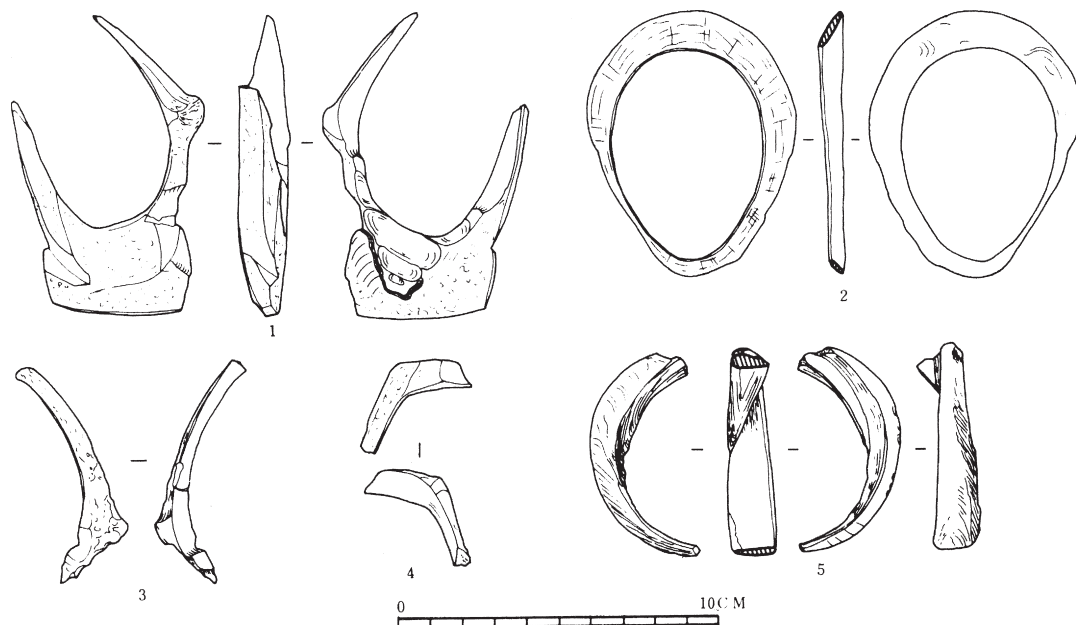
発掘調査に伴い、数多くの土壌墓や立石が発見され、また、壺形土器、高坏・埴等の多種多様な土器類、剣・刀子や鉄鏃等の鉄器類が出土した。これらの遺構・遺物等から、松之尾遺跡は弥生時代終末期より古墳時代初頭にかけて盛行した砂丘に立地する埋葬遺跡であること、この砂丘を使用した初現は、弥生時代中期に求められることなどが判明した。

出土した土器は壺形土器・小形土器・重弧文土器・甕、鉢形土器・時期も弥生時代中期から奈良・平安時代までと長期間にわたり、本遺跡が埋葬地として長い期間と営まれたことを示している。

特徴

松之尾遺跡は、景勝の地として古くから地区民に親しまれてきた松之尾海岸の後背地、花渡川河口左岸に発達した海岸砂丘に立地している。この砂丘は砂採取、港湾建設等によって、現在はその面影を留めないが、古地図写真、古老の間取り等をもとにして復元すると、標高22m、幅100m、長さ600mぐらいあって、遺跡はこの砂丘の西側寄りに位置している。

昭和47年（1972）から翌年にかけて枕崎市が行った、砂丘の南側（枕崎港寄り）の削除工事中に土器



第2図 松之尾遺跡出土ゴホウラ貝製腕輪

片，鉄鏃等が発見された。これらの遺物とともにオオツタノハ・イモガイ・ゴホウラ製の腕輪も採集され，河口貞徳により古墳時代に副葬された「鋏形石の祖形」として発表された。

ゴホウラ製の腕輪は，河口貞徳によると，貝殻のねじれた先端部と，癒着した袖部を板状部とし，1個ある肩角突起を残し，只の腹面を表として製作したものであるという。

弥生時代後期になると，貝にかわって銅が用いられるようになるが，南九州では依然として，大型で加工しやすく光沢のある南海産の貝が，腕輪の素材として用いられていたといわれる。種子・奄美以南の西・南太平洋産のゴホウラ製腕輪は松之尾遺跡のほか，熊本県や福岡県の貝塚や古墳からも発見されていて，伝播の広がりを見せている。

資料の所在

出土遺物は，枕崎市教育委員会に保管し，一部は枕崎市立図書館，南薩地場産業振興センターに展示公開されている。

参考文献

枕崎市教育委員会1981「松之尾遺跡」『枕崎市埋蔵文化財発掘調査報告書』1

小林久雄，住谷正節1940「薩摩国枕崎市花渡川遺跡」『考古学』第11巻第3号

枕崎市「枕崎市における先史時代の遺跡」枕崎市史今給黎正人1972「枕崎地方における遺物散布地について(その1)」『鹿児島考古』第5号

河口貞徳1973「鋏形石の祖形」『鹿児島考古』第8号

(前村真次)